

第3章 神社の立地と地形および災害との関係に関する研究 常陸国と下総国の事例

五反田 克也

1. はじめに

日本列島は、アジア大陸の東縁に位置しており、大陸と海洋に挟まれた場所にある。北アメリカプレートとユーラシアプレートの2つの大陸プレートに対して、東側から太平洋プレートが、南東からフィリピン海プレートの2つの海洋プレートが沈み込む変動帯にあたる。海洋プレートが日本の太平洋側で大陸プレートに沈み込むことで、たびたび日本は巨大な地震に見舞われてきた歴史がある。また、プレートの沈み込み帯で発生する地震は、津波を発生させるため、太平洋側の沿岸部は巨大な津波による被害を受けてきた。

日本列島は中緯度地帯にあるため、気候は温暖である。周辺が海洋に囲まれているため、降水量が多く、太平洋側と日本海側で季節的な降水に変化が見られる。太平洋側では、黒潮の影響を受ける地域において夏季の降水量が多く、冬は乾燥するが、日本海側では対馬暖流の影響により冬の降雪が多いのが特徴である。また、太平洋側でも寒流の日本海流の影響を受ける北海道などでは降水量が少ない。このように豊富な降水量の影響により、日本の国土は広く森林に覆われている。

降水量の多さは、自然の豊かさや食料の生産などに好都合であるが、短時間に多量の降水があることで水害が発生することも多くなる。特に、梅雨前線の発達により長く雨が降り続くことや、台風の影響により短時間に多くの降水がある場合などは被害が発生しやすい。線状降水帯の発達による短時間に集中的に雨が降ることによる洪水の発生も豪雨による被害も、河川の水が溢れる洪水から雨水の浸透により発生する地滑り、多量の土砂を流す土石流など多岐にわたる。令和2年7月の豪雨では、山形県の最上川が氾濫し浸水被害が発生している。

自然災害による被害を防ぐためには、災害に対して安全な場所や危険な場所があることを理解し、その知識をもとに防災計画を立てて行動することが重要である。土地の安全性を理解しないまま、開発を行い、自然を改変した結果として被害に見舞われた事例もある(例えば2021年7月の熱海市の土石流災害や2014年8月の広島市の土砂災害)。安易な谷

の埋め立てによる住宅地の造成などは危険な場所に住むようなものであるが、そのことを住民が理解し、大雨が降った場合に迅速に避難することができれば人的な被害は避けられる可能性が高いと考えられる。

土地が災害に対してどの程度安全であるかは、その土地の成り立ちと関係が深く、地形や地質に影響を受けている。地形はその土地が歴史的に経験してきた事象の結果として現在の姿になっているため、地形を詳細に分類することで土地の成り立ちを知ることが可能である。大阪府など太平洋側の地域では、微細な土地の起伏などに注目し、地形分類図を作成することで、発生が想定されている東海・東南海・南海地震が引き起こす津波による浸水域の想定などの各種ハザードマップの作成が行われている。

このように、日本列島は災害が多く発生する地域であるが、古来より人々は災害によるリスクと生活の便利さを検討して集落を形成していた。例えば、盆地などに形成される扇状地では水の得にくい扇央部ではなく、伏流水となった地下水が湧水となる扇端部に、河川沿いでは微高地である自然堤防に集落を築くなどしている。

古代の人々が災害とどのように向き合って生活を営んできたのかを知ることとして神社の立地と災害との関係についての研究がなされている（例えば宇野ほか 2016 や榎原ほか 2018 など）。南海地震による津波被害が想定されている四国の太平洋側や大阪などでは、神社とくに延喜式内社とよばれる古くからある神社の分布と津波浸水域との比較検証が行われている（高田・桑子 2016）。多くの神社が浸水する中で、式内社が島状に浸水を免れることが明らかになっている。

また、東日本大震災では、沿岸部で集落が津波による被害を受けている中で、神社が津波の被災を免れた事例が報告されている（高田ほか 2012）。高田ほか（2012）では、東日本大震災による津波の被害の大きかった東北地方の太平洋側、岩手県と宮城県において、スサノオを祀った神社と津波被害についての関係を調査しており、スサノオを祀った神社では大きな被害を受けた神社がなかったことをあきらかにしている。

著者は、2019 年に福島県いわき市において、沿岸部の神社の立地と被災状況を調査している。いわき市の北部の久之浜集落の海岸付近にある秋葉神社は、周辺の集落が津波により流されているにもかかわらず、より海に近い位置にありながら津波の被害をまぬがれている（図 1）。

防災についての学際的な研究



図1 (上) 福島県いわき市久之浜の位置を示した地図
(下) 秋葉神社の立地を示した写真

稲葉神社は海岸からの距離も近く、周辺の住宅は津波の被害を大きく受けているにもかかわらず、神社の建物は津波の被害を免れ無事であった。本神社は周辺よりも高い地形面上に立地している。

神社が災害の被害を受けにくい土地に立地していることは、当時の人々は災害に対して安全性の高い場所を知っており、そのような土地に集落を築き神社を祀っていた可能性が高いと思われる。人口が増え利用可能な土地が少なくなっていく中で、人々はかつては住まなかった土地、すなわち災害の被害を受けやすい土地にも進出し、その結果として被害が大きくなってきているとも言えるのである。

これらのことから、本研究では神社の立地と地形との関係性を明らかにすることで、神社と災害との関係、特に災害に対する安全性について考察を行う。研究対象地域として、かつては暴れ川として坂東太郎とよばれた利根川流域であり、東日本大震災では津波被害を受けた海岸線をもつ常陸国と下総国を選択した。旧国名としているのは、本研究の重要項目である延喜式内社が旧国単位でまとめられているためである。神社の分布を GIS を用いて地図化し、地形分類図と重ね主題図を作成し、神社の立地と地形との関係性を明らかにする。

2. 調査地域の概要

常陸国は現在の茨城県と全域のおおよそ一致するが、県の西側の一部地域が下総国および下野国に該当する。古代には親王が国司を務める親王任国であった。国府は現在の石岡市付近にあったとされ、国分寺および国分尼寺も石岡市にあったと推定されている。常陸国内の神社のうち、延喜式に記載のある神社は 27 社であり、総社は石岡市の常陸国総社宮、一宮は鹿島市の鹿島神宮である。

(表 1 常陸国の式内社一覧)

神名帳	比定社	住所	標高(m)	祭神
鹿島神宮	鹿島神宮	茨城県鹿嶋市宮中 2306 番	38.5	武甕槌命
大洗磯前薬師菩薩明神社	大洗磯前神社	茨城県東茨城郡大洗町磯浜町 6890	27.3	大己貴命
大国玉神社	大国玉神社	茨城県桜川市大国玉 1	44.1	大国主命
阿弥神社	阿彌神社	茨城県稲敷郡阿見町阿見 2353	25.5	武甕槌命
	阿彌神社	茨城県稲敷郡阿見町竹来 1366	25.5	武甕槌命
楯縫神社	楯縫神社	茨城県稲敷郡美浦村木原 2988	18.4	経津主命
長幡部神社	長幡部神社	茨城県常陸太田市幡町 539	42.3	多呂命
薩都神社	薩都神社	茨城県常陸太田市里野宮町 1052	20.1	立速男命
天志良波神社	天志良波神社	茨城県常陸太田市白羽町 1670	65.2	天白羽命
天速玉姬命神社	泉神社	茨城県日立市水木町 2 丁目 22 - 1	17.3	天速玉姬命
	鹿島神社	茨城県常陸太田市春友町 406	52.5	武甕槌命
静神社	静神社	茨城県那珂市静 2	73.9	建葉槌命
稲村神社	近津神社	茨城県久慈郡大子町下野宮 1626	135.8	饒速日尊
	稲村神社	茨城県常陸太田市天神林町 3228	33.8	饒速日尊
	桜川磯部稲村神社	茨城県桜川市磯部 772	70.3	天照大神
立野神社	立野神社	茨城県常陸太宮市上小瀬 351	74.4	綴長津彦命
	立野神社	茨城県水戸市谷津 899	87.7	綴長津彦命
筑波山神社	筑波山神社	茨城県つくば市筑波 1	843.6	伊弉諾命、伊弉册命
大井神社	大井神社	茨城県水戸市飯富町 3475	34.5	建借馬命
青山神社	青山神社	茨城県東茨城郡城里町上青山 229	62.7	五十猛命
吉田神社	吉田神社	茨城県水戸市宮内町 3193 - 2	23.7	日本武尊
阿波山上神社	阿波山上神社	茨城県東茨城郡城里町阿波山 664	30.3	少彦名命
酒列磯前神社	酒列磯前神社	茨城県ひたちなか市磯崎町 4607 - 2	24.2	少彦名命
藤内神社	藤内神社	茨城県水戸市藤井町 874	18.7	経津主命
石船神社	石船神社	茨城県東茨城郡城里町岩船 606	73	磐橿樟船神
稲田神社	稲田神社	茨城県笠間市稲田 763	69.2	奇稲田姫之命
佐志能神社	柿岡佐志能神社	茨城県石岡市柿岡 4120	51.1	豊城入彦命
	染谷佐志能神社	茨城県石岡市染谷 1856	66.9	豊城入彦命、高電神
	笠間佐志能神社	茨城県笠間市笠間 3613	117.9	豊城入彦命
鴨大神御子神主玉神社	鴨大神御子神主玉神社	茨城県桜川市加茂部 694	75.8	主玉神

防災についての学際的な研究

神名帳	比定社	住所	標高(m)	祭神
夷針神社	夷針神社	茨城県東茨城郡茨城町大戸 1768	29.2	澳津彦命、 奥津姫命
夷針神社	足尾神社本宮	茨城県石岡市小屋 1	573.9	国常立命
	胎安神社	茨城県かすみがうら市西野寺 434	24.6	澳津彦命、 奥津姫命
	子安神社	茨城県かすみがうら市東野寺 239-1	15.1	武甕槌命
	愛宕神社	茨城県笠間市泉 101	290	伊弉諾命
羽梨山神社	羽梨山神社	茨城県笠間市岩間上郷 3161	56.1	木花開耶姫命
主石神社	主石神社	茨城県銚田市大和田 1027	13.9	大山祇神
佐波波地祇神社	佐波波地祇神社	茨城県北茨城市華川町上小津田 1233	68.7	天日方奇日方命

下総国は、現在の千葉県の北部に該当し、東京都の東部の江戸川および利根川流域が含まれる。国府は市川市の国府台付近にあったとされ、国分寺および国分尼寺は市川市国分におかれていた。下総国内にある神社のうち、延喜式に記載のある神社は 11 社であり、総社は市川市にある六所神社、一宮は香取市にある香取神宮である。

(表2 下総国の式内社一覧)

神名帳	比定社	住所	標高(m)	祭神
香取神宮	香取神宮	千葉県香取市吉原 331	37	経津主大神
寒川神社	二宮神社	千葉県船橋市三山 5-20-1	25	建速須佐之男命、櫛稲田比 売命、大国主命、藤原時平命、 大雀命、誉田別命
	寒川神社	千葉県千葉市中央区寒川町 1-123	0	天照大御神、寒川比古命、 寒川比売命
蘇賀比咩神社	蘇賀比咩神社	千葉県千葉市中央区蘇我町 1-188	2	蘇我比咩大神、千代春稲荷 大神
老尾神社	老尾神社	千葉県匝瑳市生尾 75	43	阿佐比古命
麻賀多神社	麻賀多神社	千葉県成田市台方 1	36	和久産巢日神
高椅神社	高椅神社	栃木県小山市高椅 702	39.4	磐鹿六雁命
健田須賀神社	健田須賀神社	茨城県結城市大字結城 195	40.1	建田大神、素戔鳴尊
桑原神社	桑原神社	茨城県常総市国生 1186	21.7	豊城入彦命
茂侶神社	三輪茂侶神社	千葉県流山市三輪野山 619	15	大物主命
意富比神社	意富比神社 (船橋大神宮)	千葉県船橋市宮本 5-2-1	8	天照皇大御神
蛟蛸神社	蛟蛸神社	茨城県北相馬郡利根町立木 882	8.3	埴山姫命・水波之賣命

利根川を挟む本地域の地形は、貝塚ほか(2000)によると常陸国北部の山地と利根川沿いの沖積低地、およびその背後の洪積台地に大きく分けられる。常陸国南部には、日本で 2 番目の大きさの湖である霞ヶ浦が広がっている。利根川流域は、かつては香取海とよばれる内湾を形成しており、周辺には貝塚が多く分布している。現在の霞ヶ浦や印旛沼、手賀沼、牛久沼は香取海のなごりである。香取海であった周辺には低湿地が広がっており、利根川および鬼怒川に沿って自然堤防が発達している。

常陸国の北部は、八溝山地の南端にあたり、筑波山は八溝山地の南端の標高 877m の山であり、山頂に筑波山神社が鎮座している。八溝山地は小起伏な山地であり、中生代ジュラ紀に付加した中生代・古生代の地層からなる。筑波山塊は変成を受けたジュラ紀の付加体である。

関東地方にはローム台地が広がっているが、本研究地域にもローム台地が広がっている。利根川左岸の常陸国には上位のローム台地、利根川右岸の下総国の東京湾よりには中位のローム台地が広がっている。ローム台地は河川により解析が進んでおり、解析された谷には小規模な谷底平野が形成されている。

現在、銚子から太平洋へと注ぐ利根川であるが、かつては東京湾へ流れる川であり、太平洋へ流れ出るのは鬼怒川であった。徳川家康の江戸入府以降に利根川の流路を東へと付け替える事業が行われた結果、鬼怒川と合流した現在の流路となった。利根川東遷事業の結果、堆積物が多く供給されたことにより香取海は堆積がすすみ陸化していった。

3. 方法

常陸国および下総国に該当する地域に存在する神社をすべて抽出する。神社の住所、祭神、由緒については、茨城県神社誌（茨城県神社誌編纂委員会編 1973）と千葉県神社庁の HP の情報から抽出した。GIS では、地図上の事象を緯度経度で表すため、地図化するにあたり、住所ではなく緯度経度が必要である。各神社の住所から「Google map」のアドレスマッチング機能を用いて緯度経度を求めた。神社名が google map 上に見つからない場合などは、空中写真機能やストリートビュー機能を用いて神社の位置を特定し、緯度経度を求めている。また、神社の標高は、緯度経度情報から国土地理院地図を用いて該当地点の標高を求めた。

神社の分布を地図化するにあたり、GIS アプリケーションを用いた。本研究ではフリーソフトである QGIS を採用した。地形分類図は、国土交通省の 20 万分の 1 土地分類基本調査の茨城県および千葉県を使用した。

延喜式内社の詳細については、皇學館大学による式内社調査報告 11 東海道 6 相模国・武蔵国・安房国・上総国・下総国・常陸国を参照した。

4. 結果

常陸国および下総国の神社の分布と地形分類図を重ねた主題図を図2に示す。常陸国には神社が2149社、下総国には神社が1248社ある。本地域では神社が、常陸国の北部の山地には少なく、利根川流域に多く分布している。利根川流域のローム台地上に分布する神社は、ローム台地の中央部ではなく台地の縁辺部に立地している。また、利根川流域では、自然堤防上や後背湿地に立地しているものが多く見られる。

地形分類ごとの神社の数をみると（表3）、三角州性低地に立地するものが最も多く、次いでローム台地（上位）が多く、両方とも全体の30%を占めている。ローム台地には、上位から下位まで含めるとおおよそ半数の神社が立地している。山地や丘陵地といった傾斜のある地形には神社の数は少なく、大起伏山地では筑波山神社の1社のみである。



図2 常陸国、下総国の神社の分布と地形分類図の主題図
千葉県南東部は上総国のため、神社の分布は図化されていない。

常陸国の神社の分布は、三角州性低地が少なく台地上に多いことが特徴である。特に、傾斜のある山地や丘陵にも神社が立地している。対して下総国の神社の立地は三角州性低地とローム台地がほぼ同じである。下総国には山地がみられないため、山地に神社の立地がない。

5. 考察

1) 常陸国、下総国の全神社の分布と地形との関係

QGIS を用いて常陸国の神社 2149 社、下総国の神社 1248 社の分布図を作成し、地形分類図と重ね主題図を作成した結果から、ローム台地と三角州性低地に多くの神社が立地していることがわかった。

標高の低い三角州性低地であるが、340 社の神社が標高 5 m 未満の土地にある。本地域における三角州性低地は、主に河川の氾濫によって形成された後背湿地であり、河川との比高差が小さく洪水の被害を受けやすい土地である。平成 28 年の台風 8 号による大雨によって鬼怒川中流では堤防が決壊した結果、後背湿地が浸水し多くの被害がでている。また、これらの後背湿地は完新世の新しい堆積物によって谷を埋めた未固結の軟弱な地盤のため、地震による被害も発生しやすい。後背湿地は、水はけの悪い土地であるため、居住には適さないが、地形の特性を活かして水田として利用されてきた。しかしながら、人口の増加により自然堤防などの居住に適した土地が次第に減り、このような低湿地への開発が進むと共に、神社の設立が行われたと考えられる。これらのことから、三角州性低地に立地する神社については、設立年代や移転など神社の履歴を詳細に調べることで、災害に対する安全性についての評価が可能であるが、集落にあるような小さい神社では、由緒に関する情報がほとんど残っていないことが多く、検証が困難であった。

(表 3 調査地域の地形区分と神社の分布数)

地形区分	神社数	地形区分	神社数
山麓地	33	山麓地	33
小起伏丘陵地	114	丘陵地	194
大起伏丘陵地	80		
小起伏山地	100	山地	111
中起伏山地	10		
大起伏山地	1		
砂礫台地上位	24	台地	1547
ローム台地上位	1013		
ローム台地中位	303		

防災についての学際的な研究

地形区分	神社数	地形区分	神社数
ローム台地下位	207	台地	1547
自然堤防・砂州・砂丘	315	低地・微高地	1395
扇状地性低地	12		
三角州性低地	1062		
干拓地	6		

低地の中でも自然堤防や砂州といった微高地では、水害が発生しても被害を受けにくい。仮に洪水により河川から水が溢れても、周辺よりも標高が高いために水は流れていき浸水しにくいためである。水の得やすい土地であり、後背湿地にある水田にも近いために古くから集落として利用されてきた地形である。地質は砂礫質であり、水はけがよいため地震による被害も小さい。本地域において、自然堤防は利根川の流路沿いに発達しており、砂州は利根川河口付近に見られる。自然堤防上の神社数は全体の10%ほどであるが、古くから人間の生活が営まれてきた場所であり、災害に対して危険の少ない場所に立地していると考えられる。

多くの神社の立地していたローム台地であるが、本地域では常陸国に見られる上位のローム台地と下総国にみられる中位から下位のローム台地と対照的である。台地は低地よりも古い時代の更新世に形成されており、地層も砂礫質であり、上部は火山灰層に覆われている。台地の中央部は地下水面が深く水の得にくい土地であり、田畑には向かず雑木林などの森林資源の供給地として利用されてきた。特に、下総台地ではこの荒野で古くから馬の放牧が行われていた。しかし、台地を囲む段丘崖のふもとは、台地上に降った雨が浸透した地下水が湧出することがあるため、台地の周辺には集落が形成されていることが多く見られる。また、縄文海進期には、現在の低地に海水が侵入し内湾を形成していたため、台地の縁には貝塚が多く残されている。このように、台地は比高が高く水害から安全な場所であり、更新世に堆積した砂礫質の地質により地震に対しても強い耐性を示す土地である。台地の縁などに古来より人々は集落を作り、神社を祀った可能性が高いと考えられる。

2) 延喜式内社の分布と地形との関係

本研究対象地域における延喜式内社は、常陸国の27社（比定社38社）、下総国の11社（比定社12社）の合計38社（比定社50社）である。分布の特徴としては、常陸国の筑波山周辺に多いことである。筑波山をご神体とする筑波山神社の他に、山地や大起伏丘陵地に多く見られる。神社の多く分布していた利根川沿いの自然堤防や三角州性低地にはなく、周囲のローム台地に4社がみられるだけである。これは、利根川が別名坂東太郎と呼ばれるほどの暴れ川であったことにより、古くは人々が利根川沿いの土地を避けていたことが推測される。

(表 4 調査地域の地形区分と神社の分布数)

地形区分	常陸国	下総国
山麓地	33	—
小起伏丘陵地	57	57
大起伏丘陵地	80	—
小起伏山地	100	—
中起伏山地	10	—
大起伏山地	1	—
砂礫台地上位	24	—
ローム台地上位	881	132
ローム台地中位	—	303
ローム台地下位	—	207
自然堤防・砂州・砂丘	274	41
扇状地性低地	129	—
三角州性低地	554	508
干拓地	6	—

- ▼ 080地形区分 (灰リゴ)
- ☑ ローム台地 (上位)
- ☑ 干拓地
- ☑ 砂礫台地 (上位)
- ☑ 三角州性低地
- ☑ 山地
- ☑ 自然堤防・砂州・砂丘
- ☑ 小起伏丘陵地
- ☑ 小起伏山地
- ☑ 人口収束地
- ☑ 扇状地性低地
- ☑ 大起伏丘陵地
- ☑ 大起伏山地
- ☑ 中起伏山地
- ☑ 埋立地

- ▼ 120地形区分 (灰リゴ)
- ☑ ローム台地 (下位)
- ☑ ローム台地 (上位)
- ☑ ローム台地 (中位)
- ☑ 三角州性低地
- ☑ 自然堤防・砂州・砂丘
- ☑ 小起伏丘陵地



図 3 常陸国、下総国の式内社の分布と地形分類図

防災についての学際的な研究

太平洋に面した地域には、常陸国の鹿島神宮をはじめとして佐波波地祇神社、泉神社、酒列磯前神社の4社が立地している（図3）。太平洋側の沿岸部は、津波による被害が想定される地域であるが、これら4社はいずれも標高の高い地形上に位置している。鹿島神宮、酒列磯前神社、泉神社は上位のローム台地、佐波波地祇神社は山麓地に位置しているため、津波の被害も受けにくいと考えられ、水害の被害も受けにくい立地であると考えられる。

東京湾側には、下総国の意富比神社、二宮神社、寒川神社、蘇賀比咩神社の4社が立地しているが、二宮神社以外の3社は海岸に近い場所に位置している。寒川神社と蘇賀比咩神社は微高地である砂洲に位置しているが、意富比神社は三角州性低地に立地している。東京湾側の沿岸部は、地震による津波の可能性は低いと考えられる。また、現在の千葉県と東京都の境を流れる江戸川から、袖ヶ浦市を流れる養老川にいたるまでの地域には大きな河川が見られず、そのため水害の危険性も低いと思われる。かつての東京湾は干潟が広がっており、漁業活動が盛んな地域であったことから、人々は東京湾沿岸に集落を形成し神社を設立していたと考えられる。

(表5 常陸国の式内社と地形)

神名帳	比定社	標高(m)	地形
鹿島神宮	鹿島神宮	38.5	ローム台地（上位）
大洗磯前薬師菩薩明神社	大洗磯前神社	27.3	ローム台地（上位）
大国玉神社	大国玉神社	44.1	ローム台地（上位）
阿弥神社	阿彌神社	25.5	ローム台地（上位）
	阿彌神社	25.5	ローム台地（上位）
楯縫神社	楯縫神社	18.4	ローム台地（上位）
長幡部神社	長幡部神社	42.3	三角州性低地
薩都神社	薩都神社	20.1	三角州性低地
天志良波神社	天志良波神社	65.2	山麓地
天速玉姫命神社	泉神社	17.3	ローム台地（上位）
	鹿島神社	52.5	砂礫台地（上位）
静神社	静神社	73.9	ローム台地（上位）
稲村神社	近津神社	135.8	扇状地性低地
	稲村神社	33.8	小起伏山地
	桜川磯部稲村神社	70.3	扇状地性低地
立野神社	立野神社	74.4	扇状地性低地
	立野神社	87.7	小起伏丘陵
筑波山神社	筑波山神社	843.6	大起伏山地
大井神社	大井神社	34.5	ローム台地（上位）
青山神社	青山神社	62.7	ローム台地（上位）
吉田神社	吉田神社	23.7	ローム台地（上位）
阿波山上神社	阿波山上神社	30.3	自然堤防・砂洲・砂丘
酒列磯前神社	酒列磯前神社	24.2	ローム台地（上位）
藤内神社	藤内神社	18.7	ローム台地（上位）
石船神社	石船神社	73	大起伏丘陵

神名帳	比定社	標高(m)	地形
稲田神社	稲田神社	69.2	大起伏丘陵
佐志能神社	柿岡佐志能神社	51.1	扇状地性低地
	染谷佐志能神社	66.9	小起伏山地
	笠間佐志能神社	117.9	大起伏丘陵
鴨大神御子神主玉神社	鴨大神御子神主玉神社	75.8	扇状地性低地
夷針神社	夷針神社	29.2	ローム台地 (上位)
	足尾神社本宮	573.9	中起伏山地
	胎安神社	24.6	ローム台地 (上位)
	子安神社	15.1	ローム台地 (上位)
	愛宕神社	290	小起伏山地
羽梨山神社	羽梨山神社	56.1	小起伏山地
主石神社	主石神社	13.9	ローム台地 (上位)
佐波波地祇神社	佐波波地祇神社	68.7	山麓地

(表 6 下総国の式内社と地形)

神名帳	比定社	標高(m)	地形
香取神宮	香取神宮	37	ローム台地 (中位)
寒川神社	二宮神社	25	ローム台地 (中位)
	寒川神社	0	自然堤防・砂州・砂丘
蘇賀比咩神社	蘇賀比咩神社	2	自然堤防・砂州・砂丘
老尾神社	老尾神社	43	ローム台地 (上位)
麻賀多神社	麻賀多神社	36	ローム台地 (中位)
高椅神社	高椅神社	39.4	扇状地性低地
健田須賀神社	健田須賀神社	40.1	ローム台地 (上位)
桑原神社	桑原神社	21.7	ローム台地 (上位)
茂侶神社	三輪茂侶神社	15	ローム台地 (下位)
意富比神社	意富比神社 (船橋大神宮)	8	三角州性低地
蛟蛸神社	蛟蛸神社	8.3	三角州性低地

延喜式内社の立地と地形の関係から (表7)、古くから存在する式内社は災害に対して安全なローム台地に多く立地していることがわかる。特に上位のローム台地に 20 社と半数近い神社の分布が見られる。対して、水害の危険性が考えられる三角州性低地には 4 社と少ない。このことから、人々は災害に対して安全性の高いローム台地に生活の拠点をもうけ、そこに神社を設立したと考えられる。また、筑波山神社は筑波山の山体そのものをご神体としており、自然崇拜の神社は人々の生活圏とは異なる理由で建てられていると考えられる。

(表 7 常陸国、下総国の式内社の立地と地形区分)

地形分類	神社数
大起伏山地	1
中起伏山地	1
小起伏山地	4
大起伏丘陵	3
小起伏丘陵	1

地形分類	神社数
山麓地	2
ローム台地（上位）	20
ローム台地（中位）	3
ローム台地（下位）	1
砂礫台地（上位）	1
扇状地性低地	6
自然堤防・砂州・砂丘	3
三角州性低地	4

3) 鹿島神社と香取神社の分布と地形との関係

常陸国の一宮である鹿島神宮と下総国の一宮である香取神宮には、多くの勧請された神社がある。鹿島神宮と香取神宮は、古来より深い関係にあり朝廷との関係も深い神社である。両神宮は、内海が広がっていた香取海の入り口に鎮座しており、重要な位置を占めている。鹿島神宮は武甕槌大神、香取神宮は経津主大神を祭神としており、両祭神は武神として崇められている。

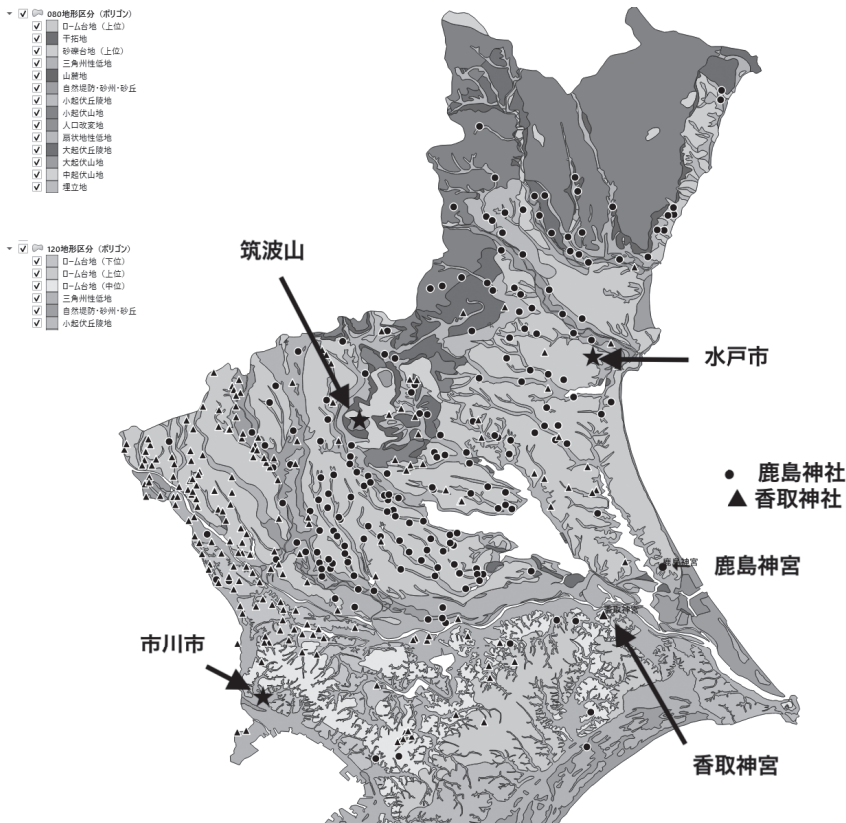


図4 鹿島神社と香取神社の分布と地形分類図

本研究の対象地域における鹿島神社と香取神社の分布を見ると（図 4）、利根川を挟んで常陸国に鹿島神社、下総国に香取神社が多く立地していることがわかる。両神社は、上位のローム台地に最も多く分布しており、ついで三角州性低地になる（表 8）。このことは、両神社は集落が新しく勧請して祀った神社であるため、人々の生活圏に近いところに神社が立地しているものと考えられる。

（表 8 鹿島神社（左）と香取神社（右）の立地と地形区分）

地形分類	神社数	地形分類	神社数
大起伏山地	0	大起伏山地	0
中起伏山地	1	中起伏山地	1
小起伏山地	6	小起伏山地	0
山麓地	2	山麓地	0
大起伏丘陵地	7	大起伏丘陵地	3
小起伏丘陵地	5	小起伏丘陵地	2
砂礫台地上位	3	砂礫台地上位	0
ローム台地上位	76	ローム台地上位	68
ローム台地中位	4	ローム台地中位	13
ローム台地下位	2	ローム台地下位	26
扇状地性低地	13	扇状地性低地	4
自然堤防・砂州・砂丘	20	自然堤防・砂州・砂丘	23
三角州性低地	58	三角州性低地	51
干拓地	0	干拓地	0

6. まとめ

利根川を挟んだ常陸国と下総国の神社の分布を地図化し、地形分類図と重ねた主題図を作成し、神社の分布と地形との関係性を明らかにした。常陸国および下総国の神社の多くは台地上と三角州性定地に立地していることが明らかになった。ローム台地は、地形の成り立ちや地質から地震に対して強く、河川からの比高も十分にあるため、水害に対しても安全性が高いと考えられることから、人々は生活の拠点を手地縁部に築き神社を祀ったと考えられる。

延喜式に見られる式内社は、ローム台地に多く三角州性低地に立地しているものは少ない。これは、式内社は古くから存在している神社のため、災害に対して安全性の高い場所に建てられた可能性を示していると思われる。

鹿島神宮と香取神宮に関する鹿島神社と香取神社の分布は、両神宮のある地域に多く分布していることが明らかになった。鹿島神社は常陸国、香取神社は下総国に多く、利根川を挟んで分布の境界が見られた。鹿島神社、香取神社は三角州性低地に多く見られるが、

これは両神社が新しく勧請されて設立されたものも多いため、三角州性低地に新しく成立した集落にある可能性が高いと思われる。

謝辞

本研究をおこなうにあたり、下総国の神社の抽出と位置情報の取得は本学政策情報学部2014年度卒業生の稲葉涼氏、常陸国の神社の抽出と位置情報の取得は本学国際教養学部2021年度卒業生の田中香穂氏、柏木亜海氏、大木楓氏に多大な協力を得た。ここに感謝の意を表します。

引用文献

- 高田知紀・高見俊英・宇野宏司・辻本剛三・桑子敏雄（2016）「延喜式内社に着目した四国沿岸部における神社の配置と津波災害リスクに関する一考察」土木学会論文主 F 6（安全問題） Vol.72.No.2,I_123-I_130
- 貝塚爽平・小池一之・山崎晴雄・鈴木毅彦（2000）「日本の地形4 関東・伊豆小笠原」東京大学出版会
- 栗原拓大・青柳憲昌・石田優子（2018）「大阪府の「式内社」の立地傾向と災害危険性から見た古代の神観念」歴史都市防災論文集 Vlo.12
- 高田知紀・梅津喜美夫・桑子敏雄（2012）「東日本大震災の津波被害における神社の祭神とその空間的配置に関する研究」土木学会論文集 F 6（安全問題） Vlo.68.No.2,I_167-I_174
- 高田知紀・桑子敏雄（2016）「和歌山県における神社空間の自然災害リスクに関する一考察」日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集 14（0）,105-108,2016
- 宇野宏司・高田知紀・辻本剛三・柿木哲哉（2016）「徳島・高知沿岸域における神社の津波被災リスクの検証」土木学会論文集 B 2（海岸工学）72（2）,I_1609-I_1614
- 茨城県神社誌編纂委員会編「茨城県神社誌」1973
- 式内社研究会編纂「式内社調査報告 11 東海道 6 相模国・武蔵国・安房国・上総国・下総国・常陸国」1976、皇學館大学出版部